

[第30回学術集会 シンポジウムⅠ]

脳腫瘍治療後のこどもの健康関連QOLの高低を 評価するのは誰か

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

佐藤 伊織

本発表では、まず次の研究結果について発表し、それに基づいて、家族内の関係性をめぐって本研究の研究デザインがどうであったか、家族内で二者から得たデータがどのように解釈できて、どのように包括的に家族を見ていくことができるのかを論じたと思います。その研究は、「小児脳腫瘍経験者の合併症が健康関連QOLに与える影響：四肢運動障害、けいれん、視覚的障害、内分泌障害、高次脳機能障害をとりあげて」です (Sato, et al. (2014). "Impact of Late Effects on Health-Related Quality of Life in Survivors of Pediatric Brain Tumors: Motility Disturbance of Limb (s), Seizure, Ocular/ Visual Impairment, Endocrine Abnormality, and Higher Brain Dysfunction." *Cancer Nursing* 37 (6): E1-14). 本抄録にて、あらかじめ内容をご紹介しますとおこうと思います。

脳腫瘍はこどものがんの約20%を占める最も一般的な固形腫瘍です。集学的治療の進歩により、生存率が向上し、多くの患者が治癒するようになりました。しかし、脳腫瘍の治療後は他のがんと比べても多くの合併症や後遺症が見られます。そのためフォローアップ外来では、合併症や後遺症を考慮しながら、こどもの生活と発達を看っていくことが必要です。この研究では、特に「四肢の運動障害」「視覚的障害」「けいれん」「内分泌障害」「高次脳機能障害」という5つの合併症や後遺症に焦点を当て、これらがこどもの健康関連QOL（生活の質）にどのような影響を与えるかを明らかにしました。それぞれの症状が子供の健康関連QOLのどの側面にどれだけ影響を与えるかを定量化することで、脳腫瘍

治療後の子供が直面する一般的な問題についての事前知識を得ることができます。

全国9施設の外来で、脳腫瘍治療後1年以上経過した12歳から18歳のこどもとその親（1患者につき1名）を対象に、Pediatric Quality of Life inventory (PedsQL) の8つの下位尺度（身体的機能、感情の機能、社会的機能、学校、考えること、動きとバランス、外見、コミュニケーション）を用いて、こどもの健康関連QOLを評価してもらいました。分析方法としては、ある症状が特定の健康関連QOLに関連しているかどうかを調べるため、症状の有無に基づくPedsQLの得点の差を、多変量分散分析により、親子の評価を同時に検討しました。

親子53組から有効回答を得て、いくつかの結果が得られました。本抄録では一部の結果を紹介するととどめますが、例えば四肢の運動障害がある場合、外見に関するQOLの低下が明らかになりました。この低下は、親による評価では見られないものでした。つまり、親がこどもの持つ支援ニーズを把握できていない可能性が示唆されました。

結果のもう一例として、視覚的障害がある場合、考えることに関するQOLの向上が見られました。先行研究でも、視覚障害のある人は一般の人と認知機能検査のプロファイルが異なり、一部の認知機能が補償的に向上していることが示されています。この、考えることの評価の変化は親の評価で特に顕著でした。こども自身は自己の強みを認識することが比較的難しいため、支援はこどもの自己認識に配慮しながら行われる必要があります。